

武蔵野日曜集会

アダムとキリスト

——ローマ書第5章12～21節——

1978年4月16日(武蔵野)

小池辰雄

神話的物語のドラマ パラダイス・ロスト 義の靈統 罪の価は死 永遠の生命 本当の自由
キリストがお前の王か 神のスペルマ

【ロマ5・12～21】

12 それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり。 13 律法のきたる前にも罪は世にありき、然れど律法なくば罪は認めらるること無し。 14 然るにアダムよりモーセに至るまで、アダムの咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは来らんとする者の型なり。 15 然れど恩恵の賜物は、かの咎の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、況て神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。 16 又この賜物は罪を犯しし一人により来れるものの如きにあらず、審判は一人よりして罪を定むるに至りしが、恩恵の賜物は多くの咎よりして義とすることに至るなり。 17 もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、況て恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや。 18 されば一つの咎によりて罪を定むることの凡ての人に及びしごとく、一つの正しき行為によりて義とせられ、生命を得るに至ることも凡ての人に及べり。 19 それは一人の不従順によりて多くの人の罪人とせられし如く、一人の従順によりて多くの人、義人とせらるるなり。 20 律法の来りしは咎の増さんためなり。然れど罪の増すところには恩恵もいや増せり。 21 これ罪の死によりて王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、我らの主イエス・キリストに由りて永遠の生命に至らん為なり。

●神話的物語のドラマ

12 それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、凡ての人、罪を犯しし故に死は凡ての人に及べり。

非常にハッキリした宣言です。「一人の人」というのは、すぐ後に出てくるように、アダム



のことです。

13 律法のきたる前にも罪は世にありき、然れど律法なくば罪は認めらるること無し。14 然るにアダムよりモーセに至るまで、

モーセは律法を与えられましたからね。

アダムの咎と等しき罪を犯さぬ者の上にも死は王たりき。アダムは来らんとする者の型なり。

即ち、アダムが罪を犯したということがずっと後に影響を及ぼしている。

アダムは来らんとする者の型なり。15 然れど恩恵の賜物は、かの咎の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、況て神の恩恵と一人のイエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。

要するに、アダムとキリストのコントラスト、それを論じているわけです。キリストのことを「第二のアダム」とも言います。

アダムが罪を犯した。そうしたら、死が来た。天地創造の最後に人間が造られて、そのアダムが——アダムばかりではない。アダムと言ったって、アダムとエバがいます——それが罪を犯したという物語が創世記3章にある。これはいわゆる相対的な、歴史的な事実ではないですよ、物語です。いわゆる人類学でいったら、こんなことはおかしな話だ。

「聖書はドラマだ」と私は言ってますけれども、相対的歴史におけるドラマと、神話的な物語におけるドラマも入っている。神話的物語のドラマが、それでは嘘かというのと、実は相対的な歴史の本質を語っている。象徴している。そういう神話でありますので、これはやはり根源的な意味において事実なんです。神話においてそういった人間の現実が暴露されている。語られている、現されている。こういうようなことから読まないと、神話に躓いてしまうわけです。

創世記2章7節に、

「⁷エホバ神、土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に吹入れたまえり。人即ち生靈となりぬ。」(創世記2:7)

とある。これも物語的な表現でもって深刻な事実を言っているわけです。「土で人を造った」というが、何も文字通りのことではない。とにかく、地的な要素と天的な要素からできている。神の「生氣」が入ってきたんですから。人間というのは本来、天地の構造を持っているわけです。天的なもの、即ち、神の息、神気が中心であった。魂は即ち、神気をもっている。「靈止」とは「靈が止まる」と書く。神霊が止められたわけだ。元来、人間は宗教的にできている。それをみんな忘れている。

そういう天地ということ。本来、人間は霊的なんです。霊的なものには霊的なやつが、サタンが誘いに来るわけだ。サタンは、どうしてできたか知りませんよ。これはどんな神学でも説明できない。サタンというやつが神さまの世界に、宇宙にどうして生じたか。天



使の一番上のやつが墮落してサタンになった、ということは一応の説明ですけれども。

●パラダイス・ロスト

自由というやつが非常に危ない。天使にも自由がある。人間にも自由がある。神に従うか従わないかという自由を、選択の自由をもっている。魂は物理的なものではないから、霊的なものだから。霊的なものはそういった自由を与えられているわけです。その自由が間違った方向に使われたので、これがサタンに変わってしまった。

これは私は非常に霊的法則の世界をうがったことだと思っています。本来、サタンというのは、ただ漠然とあったのではなくて、天使がサタンに変わったのは自由の間違った使い方による。これはミルトンが『パラダイス・ロスト』（樂園喪失）で描いています。ミルトンの『パラダイス・ロスト』は非常にサイコロジカルに——いわゆるサイコロジー（心理学）ではないですけども——霊的な法則をよく弁えて描いています。やはり、ミルトンは凄いなあと思った。

この墮落天使のサタンが、ルチフェロが、神さまに造られたアダムとエバを誘惑する。エバの方が誘惑にかかりやすいということもちゃんと知っている。そこでエバの方に蛇を使いにやった。

蛇も霊的な動物だ。蛇はヘタに殺すといかん。家を造るときに、蛇が梁にからまつていたのを殺したら、その家に祟りがきたという。蛇の霊を慰めておかなかつたものだから。生きものはみんな霊があるからね。

この蛇がエバに、

「私はある樹の実を食べたら、人の如くこのようにものが語れるようになりました。それで、非常に利口になりました。あなたが食べれば、今度は神のようになりますよ」

なんてミルトンの中に書いてある。「神の如くならん」と。それで、エバが誘われた。創世記には非常に簡単に書いてあるけれども、ミルトンはそここのところをいろいろがって書いてあります。これはミルトンの詩人らしい想像による。

アダムは初めはそう簡単に誘惑に乗らなかつたけれども、とうとう、

「やはり、一緒にいるんだから同じように食べなくてはいかん」

と言って、食べた。このアダム・エバは要するに、二にして一ですけれども。これが蛇の誘惑にかかって、禁断の実を食べてしまった。その神さまの命令に背いたということが、意志に反したということ。「神の意志に反する」ということが「罪」なんです。『パラダイス・ロスト』にも『パラダイス・リゲインド』（樂園回復）にも、両方の詩の初めに書いてある。

「人の最初の不従順が、禁断の実、死の味わいが遂にこの世界に死をもたらした云々」

と。「最初の不従順」が神さまの意志に反したことです。親の意志に反すると、これは不孝者もつとも、非常に悪い親がいたら、それは困るけれども、原則としては親の意志に反して



はダメですよ。要するに、神意に背いたこと、神意への背き、反逆、不従順、これが罪です。ところが、『パラダイス・リゲインド』の方でキリストが回復したでしょ。

「二人の人の不従順によって失われたところの樂園について私は歌ってきたが、今度は人類に回復されたパラダイスを歌おう。ある一人の人の確実な従順によって得たところの云々」

と。そういう「従順」と「不従順」とをミルトンが「樂園喪失」と「樂園回復」においてハッキリと歌っている。

●義の霊統

今度は、キリストが神意に従ったわけです。聖意体现という。聖なる意志を体现した。聖意体现を完全にしたキリストは義人である。だから、そのキリストの義が与えられるというのは、そのことです。アダムの不従順の罪によって一切の人に罪がやってきた。罪の霊統が継がれてくるわけだ。片一方は今度は、義の霊統が継がれてくる。それは如何にして可能かということですよ。

「物語でそんなことを言われたって、我々一人びとりの在り方で判断されるのが本当ではないか。大体、サタンに誘われたなんて、私たちはそうじゃない」

なんて、普通はそんなことを思うでしょう。ところが、物語の形で我々一人びとりの本当の内面的現実がそこに語られ、暴露されているわけです。誰が誘惑に本当に勝ったか。みんな躓いたり転んだりしている。誘惑といって、そんな外側で分からなくても、ちゃんとみんな良心をもっているが、良心の声に従い得ないという別な——これはパウロがロマ書7章で言っている——どうしても別な法則があつてどうにもならん。

「²⁴噫われ悩める人なるかな、此の死の体^{からだ}より我を救わん者は誰ぞ」(ロマ7・24)

と言った。そういった何か知らんけれども、強力なものが来ているのは霊的なものなんです。悪^{アク}の力がある。悪は観念ではない。

良心の判断はある、声がある。けれども、これが微力であつて、悪心というものが、悪しき心がある。サタンの虜^{とりこ}になつているところの、何か知らんけれども、そいつが強い。ということは、これが「我」なんです。自我、エゴイズム。エゴというやつが我執している。神さまの意志に従おうとしない。分かつていながらダメである。戦争は悪いと分かっているながら、みんなもの凄い兵器を造っている。この20世紀は正直危ない。要するに、正しき心とか、良心とかいうものが弱い。これは東西古今の宗教家がみんなこの問題にぶつかつて、そこを悟りで突破したり、南無阿弥陀仏の本願で突破したり、いろいろしているわけだ。福音の世界は、言うまでもなく、十字架によるわけです。

だから、何も自然科学的にアダムが罪を犯したから、その性質がただ遺伝したなんていう



ことではない。誰でもがサタンと直結しているわけだ。また、誰でもが神と直結する。だから、さつき言った天地なんだ。けれども、地がサタンではないですよ。この天的な要素が神に即するかということ。サタンに誘われたのは霊なんだから。サタンに誘われて、自己中心になっているのを「肉」という。これを「罪びと」という。神中心になっているのを「霊」という。それは「義人」への可能性をもっている。けれども、これは今、傾向性で言っているだけの話ですよ。ただ傾向性ではダメなんです。こつち(肉)は事実ですよ。ただし、こつち(霊)はまだ傾向性であって、あるときは、神に従うことも瞬間的にはあるでしょう。相対的には言えるでしょう。けれども、それが本当に従うところに行き切れない。そこに深刻な問題がある。

マルチン・ルターだってそうだ。立派なんだ、正直。パウロもサウロのときに、

「律法の義につきては責むべきところなし」

というほど立派だ。それでもダメなんだ。人間的立派さではない。そこが本当の、神の霊と一如の世界ではないから。それが罪ということですよ。だから、いわゆる聖人君子なんていう範疇と違う。私は今までの生涯で随分、立派な人に遇ってきている。けれども、次元が違う。その人はなるほど天国に往くでしょう。そのことと、本当に福音的な霊の事態とは次元が違うんです。

それで、縦の関係でも、そういった伝統的な、サタンに誘われる霊的伝統をもっている。横の関係では人間相互の自我欲でもって、しょっちゅう混沌として問題を起こしているところの社会。これが結局、罪びとの集まりだから、我執人間の集まりだから。けれども、道徳はある。良心はある。また、ある程度の規約もやっている。だから、相対的にはとにかく何とかもっているけれども、しょっちゅう問題がある。犯罪はあるし、戦争は絶えないし、そういう情けない現実ですよ、人間というものは。何も私は全部悪いなんて言いやしない。大変結構なところもたくさんありますよ。美談もあります。けれども、全体としては何とんでも、人間はそれ自体ではどうにもならない。それを罪とか、煩惱とかいう。仏教とキリスト教が、何といっても世界に救いの音信おとずれをする二大宗教であるわけです。

● 罪の価は死

そこで、パウロが

「罪の価は死である」

と言っている通り、みんな罪びとであって、誰でも死ななければならぬ。律法が来ているように来ているが、同じことだ。全部、死は王であると。死は神の審判なんです。自然の死ではない。自然的な死もありますよ、もちろん。自然的な死でもありますよ、肉体的は衰えていくから。肉体的、自然的な死でなくて、神の審判に遭って、魂はどうしても永遠の生命に至らないという。



それはもちろん、ギリシヤには靈魂不滅という説がありますよ。それから、仏教でいうと、輪廻でグルグル回転して、だんだん浄化されていく。ソクラテスなんかは、「可いかな、この死」と言つて、死を突破していった。彼は本当に国法に従つて、自分が死ぬのが自分の今の在り方だと。裁かれるに及ばないけれども、間違つた裁きをあえて受けてしまった。ソクラテスみたいな、ああいう死は死にはしませんよ。ダイモニオンの導きによつて、彼はやはり生きていた。神の導きによつて生きていた。

霊界はそう簡単に結論はできません。「第二の死」というところに来ると、本当に滅ぼされてしまうけれども、それまではまだ仮地獄なんだ。仮地獄と仮天国なんだ、死と言いましても。仮地獄や仮天国に入つて、どのようにして霊界で魂がだんだん救いに往くかということは、ダンテが大分描いていますけれども。まあ、あまりそんなことを、こちらでもつて結論を出そうなんて思つてはいかん。どれにしたつて、想像における蓋然性であつて、決定的なことは誰にも言えない。

しかしながら、問題は、相対的にどうのこうのという、魂の状態や死後のことを考えるよりも、どれが本当の生命であり、どれが本当の死への道であるか、そのことを窮めることです。本当の死への道へ往つたら大変だ、本地獄に往つたら。仮地獄なら、キリストは地獄へ下りて行つて救うこともなさるでしょう。しかし、本地獄の時が来たら、最後の審判の時が来たら、おしまいだ。話は充分、黙示録の方まで行つてしまつたけれども。

●永遠の生命

15 然れど恩恵の賜物は、かの咎の如きにあらず、一人の咎によりて多くの人の死にたらんには、況て神の恩恵と一人の人イエス・キリストによる恩恵の賜物とは、多くの人に溢れざらんや。

非常にコントラストした強い言葉ですね。「恩恵の賜物」とは、「カリス」において、恩恵において与えられるところのもの。キリストの恩恵。これは罪の赦しと、それから、永遠の生命です。これが恩恵の賜物です。贖罪。罪が贖われたんですから。罪の死から抜けるから、今度は生です。死に対して生。贖罪に対して与えられるものは、今度は義です。即ち、この永生というのは要するに、一字で言うならば、本当に神の、キリストの生きた「義」のことをいうわけです。これが多くの人に溢れるという。

16 又この賜物は罪を犯しし一人により来れるものの如きにあらず、審判は一
人よりして罪を定むるに至りしが、

即ち、アダムの不従順によつて神の審判がきた。パラダイス・ロストになつてしまった。パウロはどこまでも昔のひとですから、アダムというものをちゃんとそういつた実在と考えているわけです。我々はそれを実在として見たつていいけれども、しかし、実在というようなことであるよりも、とにかく、人間が造られた最初から——その最初の人を「アダム」



と言おうが何でもいいですが——最初から各個人は神に直結している。そして、その事態は正にアダムの罪を犯した不従順と同じことをみんなが繰り返している。

「義人の義はその人に帰し、悪人の悪はその人に帰する」

という因果関係は考えなくては。エゼキエル書の中にそういう言葉がある。親が悪いことをしたからといって、子が悪いわけではない。親がよいことをしたからといって、子がよいわけではない。各人がその善悪は自分が責任を負うものだ。それはそうですよ、道徳の世界では。また各人はそのようにして、神と直結しながら、みんなこれは罪びとで、アダムが罪を犯したと同じことをやっている。だから、「アダムにおける罪は」とパウロが歴史的にこういうように言っているのを、その角度から見ればいいわけです。「歴史的」にと言ったって、パウロにとっては歴史だけれども、神話的表現における根源の事実です。

だから、審判さばみは一人よりして罪を定めるに至ったけれども、

16……恩恵の賜物は多くの咎よりして義とするに至るなり。

さつき言ったこの義です。贖罪と永生によってキリストの義がやってきた。義とされる。どうして義とされるか。「信仰によって」という。信仰によってこれを受けとる。我々はいきなり直接に義になれないから。贖罪というキリストの十字架の恩寵を、恩恵、そして、永生という賜物を受けとる。

「我らの義とせられんために甦えり給えり」

と書いてあったね。それはみんな、これをそのまま、自分に関わるものとして受けとることを信と言うんですよ。いいですか。「そういう事実であります」という命題を信じたってしょうがない。

「私は罪が贖われました。私には永生が与えられました」

ということ、自分に関わる事態として受けとることを信仰と言います。信受です。パウロがこういうことを言っているから、「なるほど、そうですね」ではしょうがないんだ。自分のこととして受けとるまでは、これは読めない。

「恩恵の賜物とは多くの人に溢れざらんや」

とあれば、

「はい、私にも溢れました」

というわけです。

「義とするに至るなり」

とは、

「はい、私も義とされました」

ということ。

17もし一人の咎のために一人によりて死は王となりたらんには、

私たちにとって、死は君臨している王なんだ。生まれつきの我々は、死が王となっている。



生ける屍なんだ。

況^{まし}て恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・キリストにより

生命^{いのち}に在りて王たらざらんや。

「恩恵と義の賜物」とハッキリ言っている。十字架の贖罪の恩恵と、その義の賜物。彼が完全に神さまに従った、その実存そのものをいただく。それは滅びないところの生命であります。ただ生命が義ではないんですよ、「神に従っている」というのでなければ。本当の「永遠の生命」の質は何かという、神に本当に従って、神の意志を受けとっているという義の事態が、永遠の生命です。

● 本当の自由

では、キリストはどういうときに神さまに従いましたか。洗礼のヨハネは悔改のバプテスマをやっていました。キリストは悔い改める必要はないんだけど、それでも彼は人間の弱さを持っているから、我々と同じ立場に立って、悔改のバプテスマを受けた。彼は罪を犯したのではないけれども。人間の弱さをそのまま持って、我々と同じ場に立って、悔い改めを受けた。むしろ、我々のために悔い改めた。そうしたら同時に、聖霊が臨んできた。キリストには聖霊が臨んできた。悔改のバプテスマは同時に聖霊のバプテスマになった。そうしたら、神さまは何と言ってきたか。

「われ汝を悦ぶ。汝はわが愛しむ子なり」

と。悦愛。悦ぶ、愛するということ、彼が本当に平伏して、自分を何者ともしなかった。罪びと同じところに立った。これが私の言っている、自分を何ものともしない、無者ということ。無者の現実に立ったら、神さまが悦んだ。そこが聖霊のバプテスマを受けたことの彼の土台なんです。そうしたら、それは「悦ぶ、愛する」という。そして、

「汝の聖意を成させ給え」

を彼は貫いた。

「どうぞ、私をお使いください」

と。それが「義」の姿なんです。義の姿はいつも神さまに愛されている。神を一切にしているから。義において神の愛が生きている。そうでしょ。それが永遠の生命です。永遠の生命の質は、義にして愛なるもの。だから、これをいただくと、これを人に与えざるを得ないことになってくる。

自由を私して、「私は自主である」なんてやったら、これはサタンの子になってしまう。

自由は、

「神さまに是従う」

といって僕の姿になると、本当の自由であるという、逆説的になる。本当の意味における自由なんていうものは普通の人には分からないですよ。自由に対して死ぬときに、本当に



自由になる。神さまの御意に従うか、従わないかという自由がある。従うときには、自分を捨てているときなんです。いわゆる自由を捨てているときなんです。そうすると、本当の自由がやってくる。とこういうわけです。だから、

「恩恵と義の賜物とを豊かに受くる者は一人のイエス・キリストにより生命に在りて王たらざらんや」

と。神さまの霊生をいただいで——パウロはそこで「霊生」とでも言ってもらいたかったね——本当に王者である。

『クリスチャンの自由』にルターがそのことを書いた。

「何びとも依存しない。ただ神にだけ依存している。だから自由である。だから王者である」

と。何びとも依存しない。でも、この自由は何の自由か。今度は、万人に仕える。万人に仕えるのも自由ですよ。卑屈で仕えているのではない。「仕える」という言葉が何かちょっと躓きになるけれども、万人を愛するということです。愛するとは助けるということ。「仕える」「僕となる」ということは、相手を助ける、担い上げるということなんです。キリストの僕となったパウロは、今度はあらゆる人を担い上げるところの力を持っている。救い上げる力を持っている。だから、あの大伝道ができたんですよ。自由と愛とは離すことができない。

「王者であり、奴隷である」

ということとは、全く同じことを別な角度から言っているだけの話です。人を助けることが奴隷の姿ということ——「奴隷」という言葉は嫌いだけれども——僕の姿です。王者であるためには、どういう姿かというところ、神さまに対しては全く平伏して僕でなければダメです。何ものにも属しないということ、それが王者ということ、自由ということです。その自由は勝手気儘の自由ではなくて、人を自由自在に助けていくところの自由なんです。

それで、みんな分かったような顔をしているけれども、まだみんなは分からない。

18 されば一つの咎によりて罪を定むることの凡ての人に及びしごとく、一つの正しき行為によりて義とせられ

「正しき行為」と言ったって、これは神さまの意志を完全に行じたことが、この「正しき行為」です。聖意体現によって義とせられ、

生命を得るに至ることも凡ての人に及べり。19 それは一人の不従順によりて多くの人の罪人とせられし如く、一人の従順によりて多くの人、義人とせらるるなり。

この言葉をミルトンが詩の中に使っているわけだ。「多くの人」なんてパウロが言ったって、

「あんたもそうだよ、君もそうだよ」

と、そう読まなくてはダメですよ、「私もそうですよ」と。ただ神学的命題が分かったって



どうにもならない。

20 律法の来りしは咎の増さんためなり。

律法が来ると、いかに自分がそれに従えないか、本当に満たし得ないかということが分かるから、いよいよ咎や罪に対するところの意識が強くなる。

然れど罪の増すところには恩恵もいや増せり。

躓きの言葉ですね。

「では、私は大いに罪を犯してやろう。そうすると、恩恵が増すから」

なんて、そうではない。罪意識のいよいよ深刻になるところに、逆に恩恵は大きくなってくる。また、キリストが譬話で言っていらいらっしやるように、

「私は悪いことをたくさんしました」

「しかし、お前は一番恵まれた」

と。逆に赦されたことによつて、そういうことも、もちろんまた考えられるけれども。「それでは、罪を犯してやろう」という結論にはならない。暗黒が強ければ強いほど、光は凄いとわいわけだ。自分の意識において暗黒が強いということは、人間がいかに「悩める人」であるかということ。だから、パウロがロマ書7章で、

「²⁴ 噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救わん者は誰ぞ。

とパウロが言っている。そうしたら逆に、されど、

²⁵ 我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」(ロマ7・24～25)

と言つて、8章で大凱歌をあげている。正直、彼はそのような男でした。人間は矛盾構造だから、生まれつきの我というものと、救われたる我と、地上にある限りそこには戦いがある。「あの人は立派で、なんとかかんとか」と、私はああいう言葉はちつとも信じないよ。人間なんていうものはドラマチックな構造にできているんだから。

●キリストがお前の王か

²¹ これ罪の死によりて王たりし如く、恩恵も義によりて王となり、

もう一つ言つと、

「サタンがお前の王か、キリストがお前の王か」

ということ。キリスト者というのは、キリストが自分の王者であるところの、自分の主人であるところの者です。だから、「主よ」と言うんです。

「主さまー」

と言うのは、

「自分はあなたの僕ですよ」

ということ。「主さま」と言うときに、「僕」という意識がなかったら、「主さま」なんて言つたつてダメだよ、それは。みんな、呑気な顔して言つたつて。よく、祈りの中で、祈り



のついでに「主さま」なんて言う人がある。ダメだよ、それは。「主さま」と祈るときは、これは祈りの中で一番強い言葉だから、自分が本当に平伏していなければ、「主よ」ということは言えないわけです。自分が平伏さないうで、「主よ」なんて勝手なことを言ったってダメなんだ。キリストが「父よ！」と言うときは、本当に「自分はあなたの子である」ということの自覚のもとに言うておられる。軽々しく祈ってはいけません。

それで、「キリストが王か、サタンが王か」ということ。

我らの主イエス・キリストに由りて永遠とこしえの生命に至らん為なり。

「至らん為なり」なんて言わなくてもいいんだ、パウロは。主イエス・キリストが王者ならば、永遠の生命はやって来ます。「永遠の生命に至らん為なり」なんて、「永遠の生命」を目的としてはダメです。そうすると、幸福主義になる。御利益主義になる。

「たとえ地獄に落ちてでも」

と、親鸞が言ったではないですか。あれが本当の信なんです。

「たとえあなたに殺されても」

と、ヨブが言ったでしょ。

「キリスト一切」

と言ったら、もうこっち側はどうでもよくなってしまふ。そうすると、なんだか、もの凄いことになるんです、結果は。結果を目的にしてはいかん。楽しみを目的にして生きているのは、本当の生き方ではない。本当に生きていると、楽しみがこぼれてくるというだけの話だ。

● 神のスペルマ

そこで、私は最後に言いたいことがある。ギリシヤ語に「スペルマ」という言葉がある。これは字引をひっぱると、「植物の種」ということです。さつきから、「霊的」と言っているでしょ。サタンの手下になっていると、私たちの中には悪の種子が蒔かれているんです。こいつが力を持っている。霊的だから。観念でないから。我々は「信仰によって」と言うけれども、キリストの義を、義なるキリストを、その永遠の生命を受けとるのに、この信が単なる観念では勝てないです、観念信仰では。そこで、聖霊のバプテスマにおけると、この「スペルマ」、種が入ってくるんです、神の種が。このことをちゃんとやっているところがある。ヨハネ第一書の3章9節に、

「凡て神より生るる者は罪を行わず、神の種うちその衷とどに止まるに由る。

これは大事な言葉です。神のスペルマが止まるにより、

彼は神より生るる故に罪を犯すこと能わず（ヨハネ一3:9）

と、ハッキリ書いてある。凄いな、これ。「罪が無いというなら、それはうそだ」と最初の方には書いてありますよ。書いてありますけれども、神の種が来れば罪に勝てる、サタン



に勝てる」と。

「神のスペルマ(種)が彼の中にとどまっている、宿っている」

と書いてある。「神のスペルマ」とは聖霊のことですよ。

「聖霊が宿らざるものはキリスト者にあらず」

と、パウロは言っている。使徒たちがなぜ立ち上がることができたか。みな聖霊のバプテスマによった。聖霊がやって来たから。さつき私は、「キリストが聖霊のバプテスマを受けました」と言ったときには、「スペルマ」のことは言わなかったけれども。即ち、「スペルマ」と「聖霊」とは同じことを別な表現で言っているだけの話です。いいですか、これは御霊のバプテスマということがハッキリ分かる。その大きなドイツ語のギリシヤ語の字引にも書いてある。

「神の霊によつて我々の中に植えつけられたところの新しい生命の核である」

と。「スペルマ」のところをそういうように書いてある。最初は植物の種のことを言っているんだけど、聖書におけるところの本当のスペルマは、このスペルマが来ると、カリスマになる。カリスマ的な力がある。「カリス」はさつきの恩恵。「カリスマ」は賜物。神のスペルマが、聖霊が——もう少しハッキリ言えば「霊核」と言つたついでいい。御霊の核がある——これが入つてこなければ、キリストと一緒に勝てない。だから、

「御霊の信仰でなければ勝てない」

と言つたのはそのことなんです。いわゆる「信仰、信仰」なんて、いくら言つたつて始まらない。

ローマ書の5章は——これは内村先生もこれをそこまでは書いてない——「そういうように来た」といつて、ただ「ああ、そうですか」といつて読んでたつてしようがないんです。では、どうしてそのような、我々がキリストの溢るるばかりの恩恵にあずかり得るかというと、そのポイントはこの「神の種(スペルマ・トゥー・テウ)」を、キリストの霊を、宿し(メネイン)ていないとダメだ。そうすれば勝てますという。「楽園回復(パラダイス・リゲインド)」の一番中心は、みんなこれ——一人の人(アダム)によつて罪は来た。一人の人キリストによつて救いが来た——我々一人びとりがキリストに属して天国人であるか、サタンに属して地獄人であるかということ。

そこは単なる自分の決断でも何でもありません。このキリストのスペルマで、サタンの悪のスペルマを除かなくては。そいつに打ち勝たなくては。これは勝てますよ、キリストのスペルマが一つ来れば。そんなサタンの癌みたいな悪い核だよな。人間は——肉体的な癌よりももっと霊的な癌の方が悪い——これにはなかなか勝てない。この霊的な癌をやつつけるのはキリストのこのスペルマ、聖霊であります。そしてこれは、このスペルマで人を助けに行く。聖霊の按手によつてスペルマを移していく。

もう、聖霊が来たら、何ものにも屈しなくなる。そして、自分で偉ぶるのではない。い



よいよ謙遜になっていく。いよいよ平伏していく。それを無者と言うんです。キリストは聖霊の人だったけれども、決してそれを私しなかった。どこまでも神さまのものとしていた。神のものなんです。キリストのものなんです。もし、それで「私はもう霊的に強くなった」とやっつてごらん。今度はサタンの手下になるから。傲慢の霊はサタンの霊ですから。

このスペルマ(聖霊)はどうして来るか。十字架の恩恵を通さなければ、スペルマは来ない。即ち、贖罪を通らなければスペルマは来ない。だから、キリストと一緒にいたペテロやヨハネにいきなりスペルマは来なかった。キリストが十字架にかかってから、祈っていたら、聖霊がやっつて来た。

私たちがこのロマ書5章で受けとることは、この一人の人から一つの霊をいただく。御霊は一つ、賜物たまものはさまざま。この「一」ということが如何に大きなことか。悪も一からやっつて来た。救いも一からやっつて来た。我々の実存も、この聖霊という一者をいただくことによつて、無限無量となつてくる。ゼロ、一、無限無量。贖罪された無の世界に一が入ってきた。その一は実に無限無量で、キリストと一如である。一ということがどんなに大事なことか、それでも分かる。パウロがここで「一人、一人」と言っている。

「あなた方も本当の一人だぞ。本当の一人、キリストと一つになった一になる」

と。孤軍万軍という。何も寂しくない。まあ、これだけの福音を受けたら、言うことないですよ。

それで、『パラダイス・リゲインド』にこういう文句がある。第一巻の46行から、

「神は今や彼の生ける徴をこの世の中に送った。それは彼の最後の意志を示さんがために。真理の霊を、彼の霊を、今後、敬虔なる魂に住まわせんがために、その霊を遣わした。それは内なる徴であつて、人々にとつて知らなければならぬところの、凡ての真理に対して内なる徴を与えたのである。」

と。これは聖霊のことです。こんな文句があつたかと思つてびっくりした。

そういう意味で、我々の信とは、正にそのような聖霊というスペルマを宿さなければ、観念信仰ではどうにもならない。しかし、これによつてキリストの恩恵が実体となるというわけです。

